触って
R18
18歳未満
購入・閲覧禁止
愛して。
BOCCHI THE ROCK!
Unofficial Fanbook

※注意※

オメガバース・ftnr表現あり。
ぼっちがα、喜多ちゃんがΩです。

-目次-

触って、愛して。/ 雪村そら …p4
蠱惑の罠に嵌められて / 有明灘 …p36

あとがき・奥付 …p44

私はアルファで、オメガの喜多ちゃんと付き合っている

彼女のことを大切にするあまり

すみません…やっぱりできません…

どうして？私のこと…嫌いになった？

ちがっ…そういうんじゃなくって……

ちょっと今日、調子悪いかもしれないです…私

また…今度にしませんか？

そっか…じゃあまた今度ね！

体調大丈夫？

すみません……

触れられない

えっ、喜多ちゃん
また休みなんですか!?

そー。
今回のヒート
結構キツイっぽい。

ロイン来てた。

ほれ。

さっつーごめん！
今日も体調悪くて休む…

りょ、体調大丈夫?

いつものやつなんだけど、
ちょっと今回キツめで…
心配ありがと！

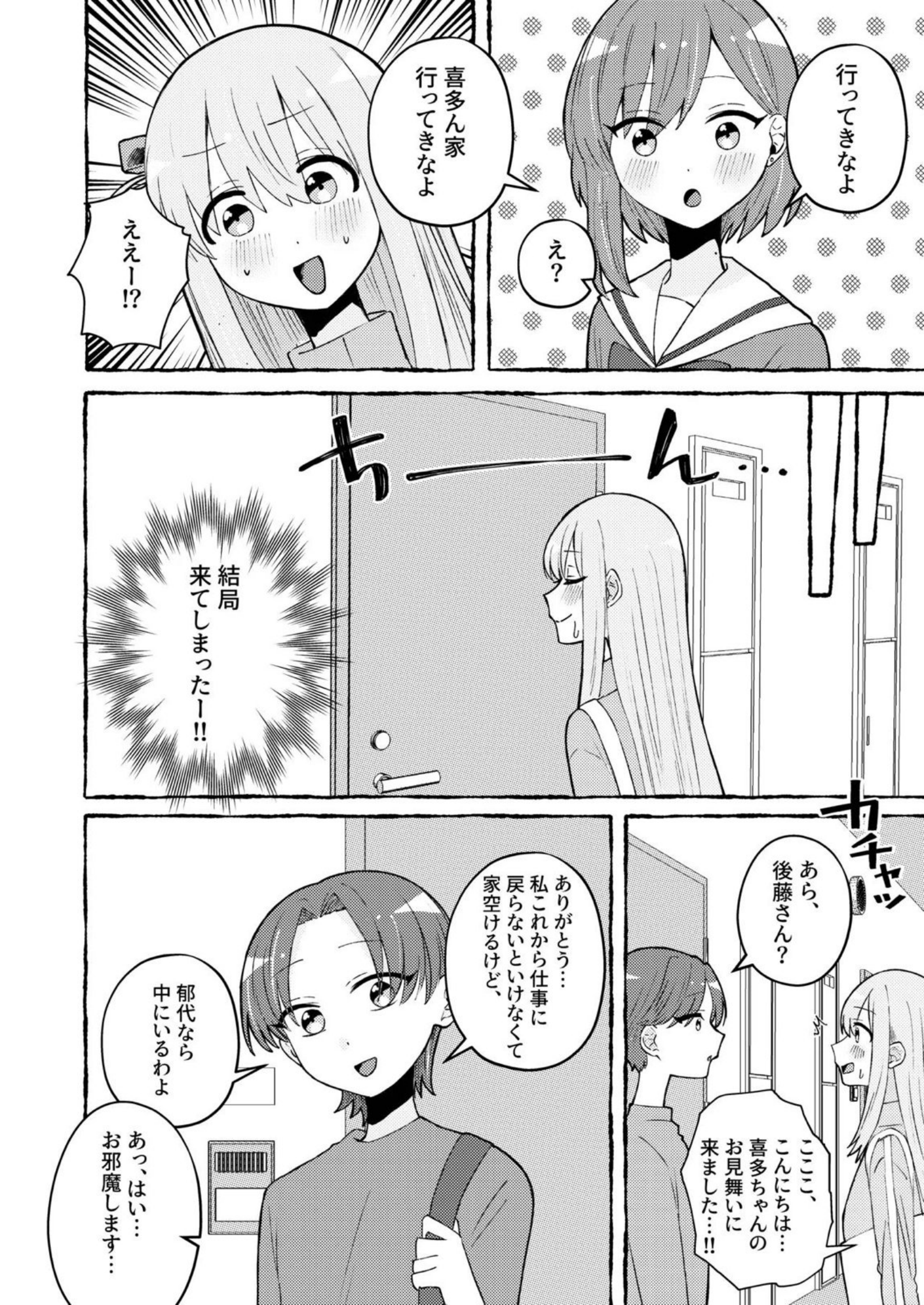
無理しないようにね

どうして……

モヤッ…

どうして
私じゃなく
佐々木さんに…

…
むーっ…
ごとー…嫉妬してる？
へ？
喜多ちゃんの一番になりたい…と思ったことがないと言えば嘘になる。
キャっ…
そそそ、そんな…私が？
うん、そうにしか見えん
だけど私はアルファだから、オメガの喜多ちゃんをいつか乱暴に襲ってしまうんじゃないか…
嫉妬なんて…
けど、こんな私でも喜多ちゃんの一番頼れる存在になれたらなって…


行ってきなよ
え？
喜多ん家行ってきなよ
ええー!?
ちーーん…
結局来てしまったー!!
カチャッ
あら、後藤さん？
ここここ、こんにちは…喜多ちゃんのお見舞いに来ました…!!
ありがとう…私これから仕事に戻らないといけなくて家空けるけど、
郁代なら中にいるわよ
あっ、はい…お邪魔します…

ガチャ…
フーッ
喜多ちゃん…？
フーッ
フーッ
フーッ
フーッ
この距離でもフェロモンの香りがっ…ビリビリする…
フーッ
フーッ
フーッ
フーッ
フーッ
喜多ちゃん…？
ビクッ
ひとり…ちゃん？ダメっ…こっち来たら!!

でも…

私いま
おかしいの…!!

分かってます…
いつもより酷いって
佐々木さんから
聞きました……

じゃあ…

なんで私に
言ってくれなかった
んですか…?

私…
嫉妬しちゃってた
みたいです…
佐々木さんに……

へ!?

喜多ちゃんが…私以外の人を頼って連絡してるのが…

その…モヤモヤするっていうか…

ひとりちゃんに心配かけたくなかったの…こんな姿も見られたくなかった…

私は喜多ちゃんに頼られたい…!!

それに喜多ちゃんの色んな姿が見たいです…どんな姿でも…

ひとりちゃんがそう言うなら…頼っちゃおうかな…

なっ、何でも言ってくださいっ…!!

じゃあ…

え!?オナニーを見てて欲しい…!?

見られてると…興奮するの…こんなの変よね？

やっぱいいわ…ごめんなさい……

だ、大丈夫です…!!見てます…!!

ひとりちゃん…

あっ♡
はっ♡
じ〜っ…
くちゃっ
くちゃっ

ひとりちゃっ…
あっ……
えっ…

あっ
ダメッ♡
イッちゃう♡
私の名前呼んで…
ビクビクッ…
プシッ…

ひとりちゃん…

それ…

ギンッ!!

こここっ、これは…
そんなにじっと
見ないでください…!!

ギンギンッ

じーっ…

だって…
すっごくおっきく
なってるから…

あ、当たり前ですよ…
喜多ちゃんの…
あんな姿…見てたら…

ひゃうっ!?
喜多ちゃん…
何してっ…!?
さわっ
ひとりちゃんもここ…
放っておいたら辛いでしょ?
そうですけどっ…!!
抗えない…!!

ひとりちゃん…
気持ちいい？

ひゃっ…なんか…
くすぐったいですっ…

さわ…

さわ

…。

レロッ

ちょっ…!!

やっぱり
お口でしょっか♡

喜多ちゃ…
そんなとこ…!!

っあ…

ビクッ

じゅぷっ♡

汚いですっ…てばっ…

じゅるるっ♡

ビクビクッ

喜多ちゃんの口…温かくてヌルヌルしてる…気持ちよすぎてもうっ…!!

ああっ…もう無理っ…!!出ちゃうーっ…!!

ドピュッ…♡

ベトォ…

ひとりちゃん…

すすすすっ、すみませ…!! うわっ、私なんてことを…!!

ベト〜っ…

すみませんっ、すぐ拭きますっ…!!

いいのに…

ポタ…

よくありません…喜多ちゃんの綺麗な顔が台無しです…

ねえ、

ひとりちゃん…

シちゃう…？

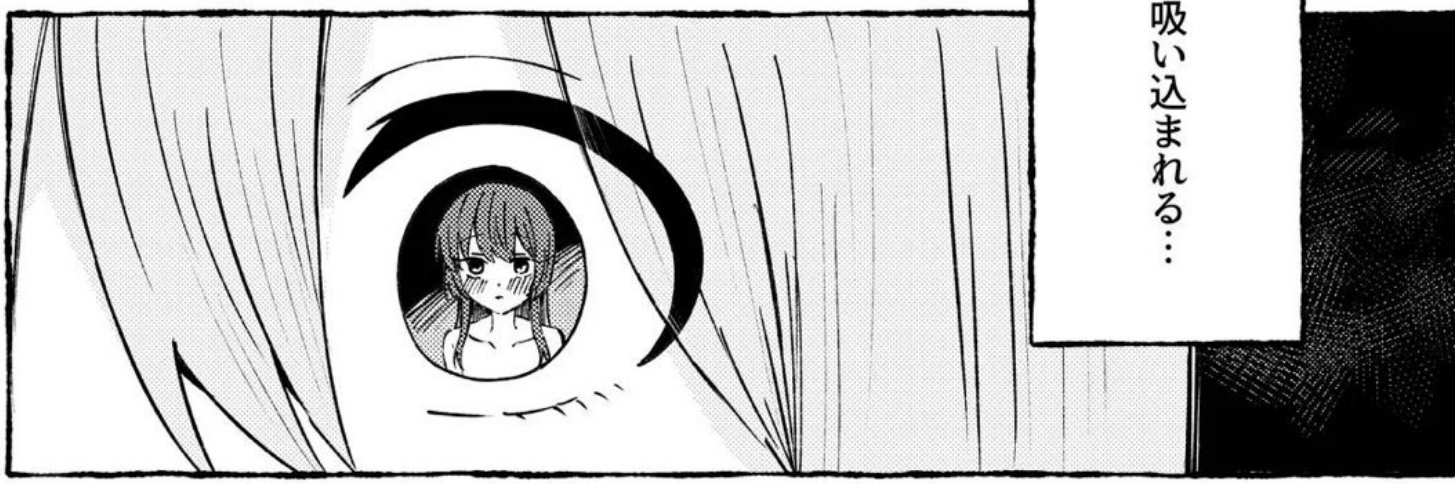
あ、またこの眼…
やばいやつだ…
どうしよう…

じっ

無理だ…
抗えない…

じっ

吸い込まれる…



がしっ

やっぱりダメです…!!

喜多ちゃんを
傷つけたくないんです…

どうして？

アルファの私がヒート状態の喜多ちゃんと…その…シたら…

優しくできる自信がありません…!!

乱暴してしまうかもしれない…

もしそうなってしまったらと思うと…とてもできません…!!

大丈夫よ。

大丈夫じゃないですよ!!

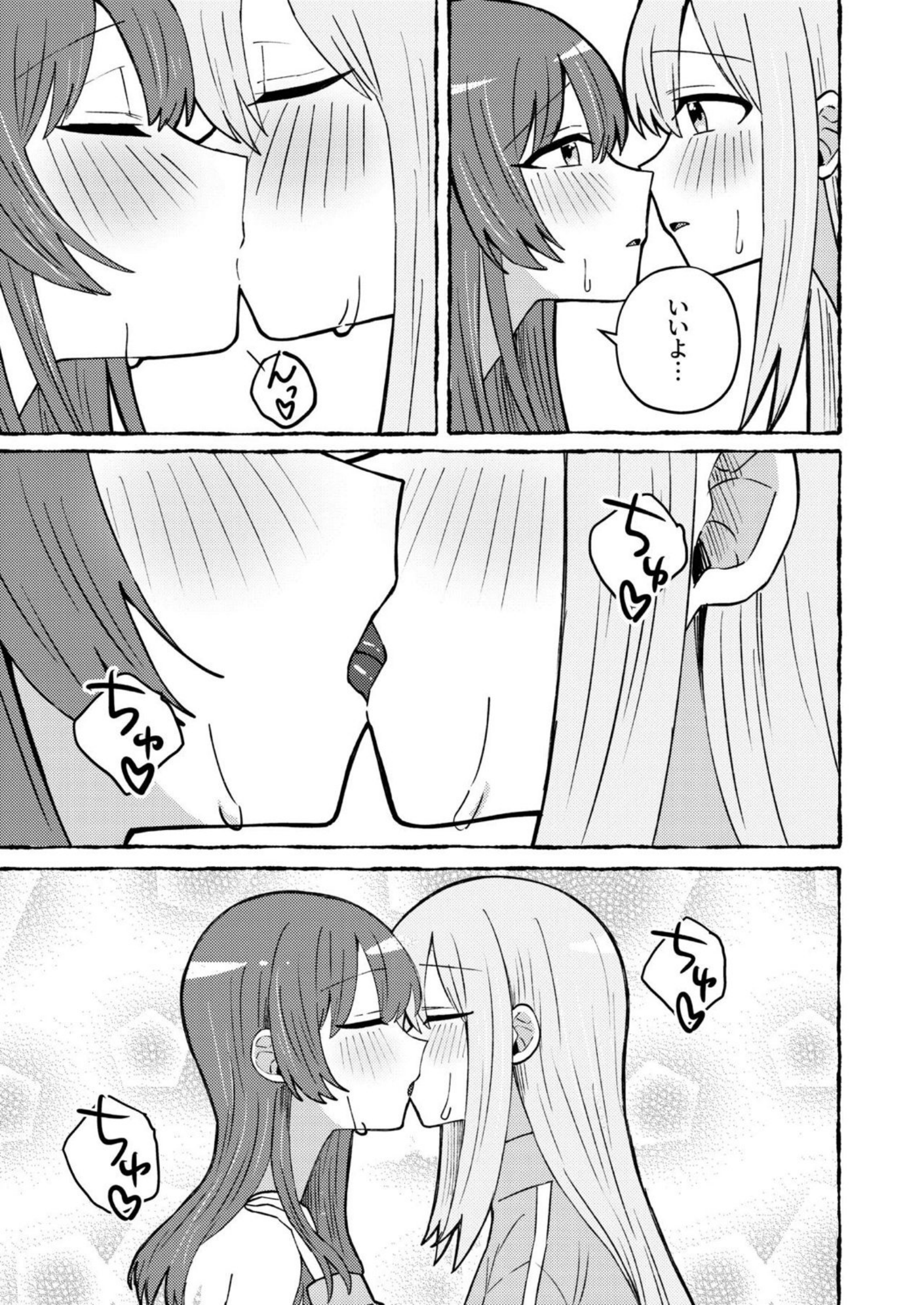
ぎゅっ…

大丈夫。

ひとりちゃん、優しいじゃない。2人で乗り越えていきましょう。

ぐるぐる…

キス…していいですか？


いいよ…
んっ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡

はーっ♡
はーっ♡
はーっ♡
はーっ♡
トロォ…♡

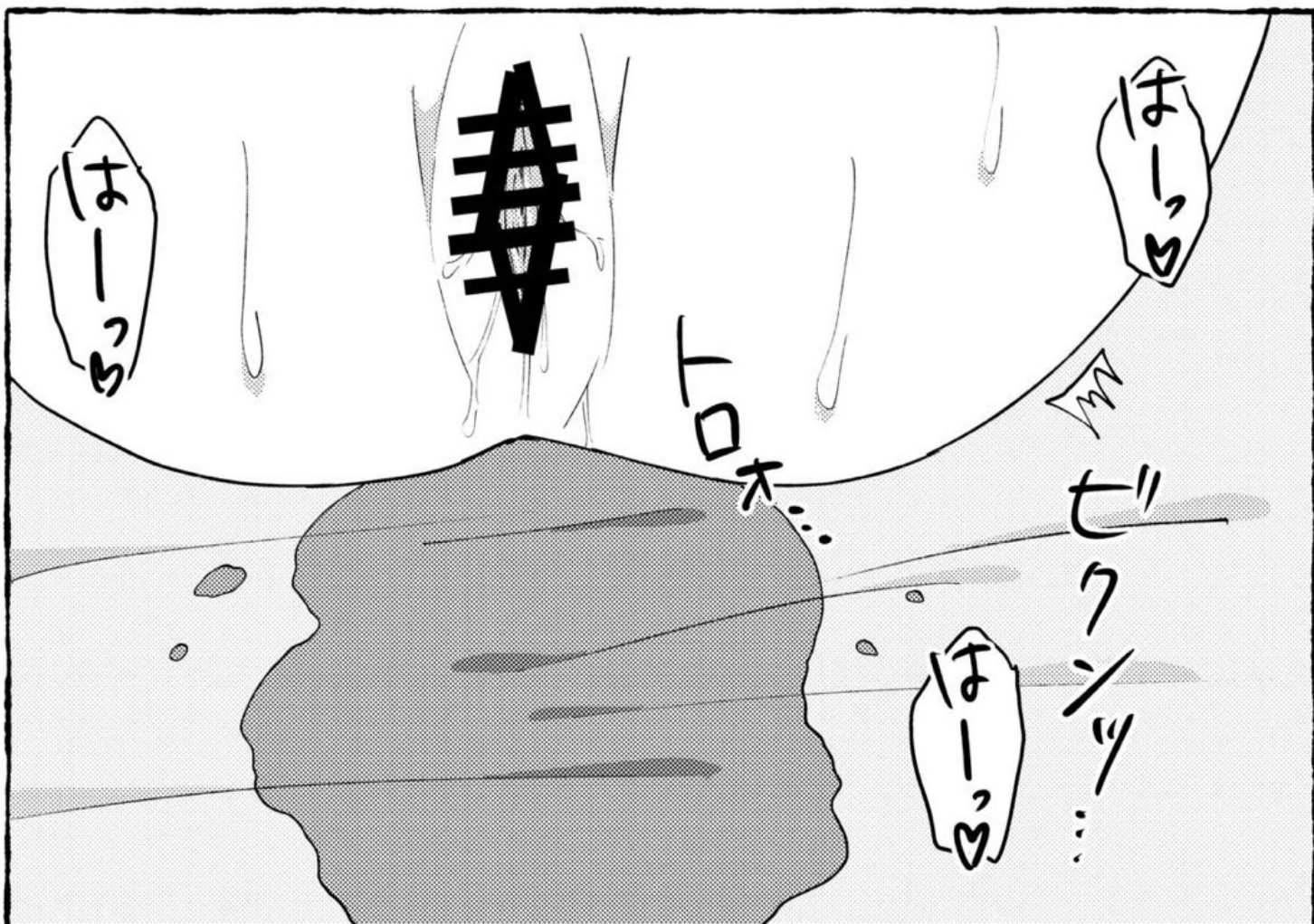
ひとりちゃん…
はーっ♡
私もう…
我慢できない…

はーっ♡
はーっ♡
私も…
はーっ♡
我慢できそうに
ないです…
はーっ♡
ジー…

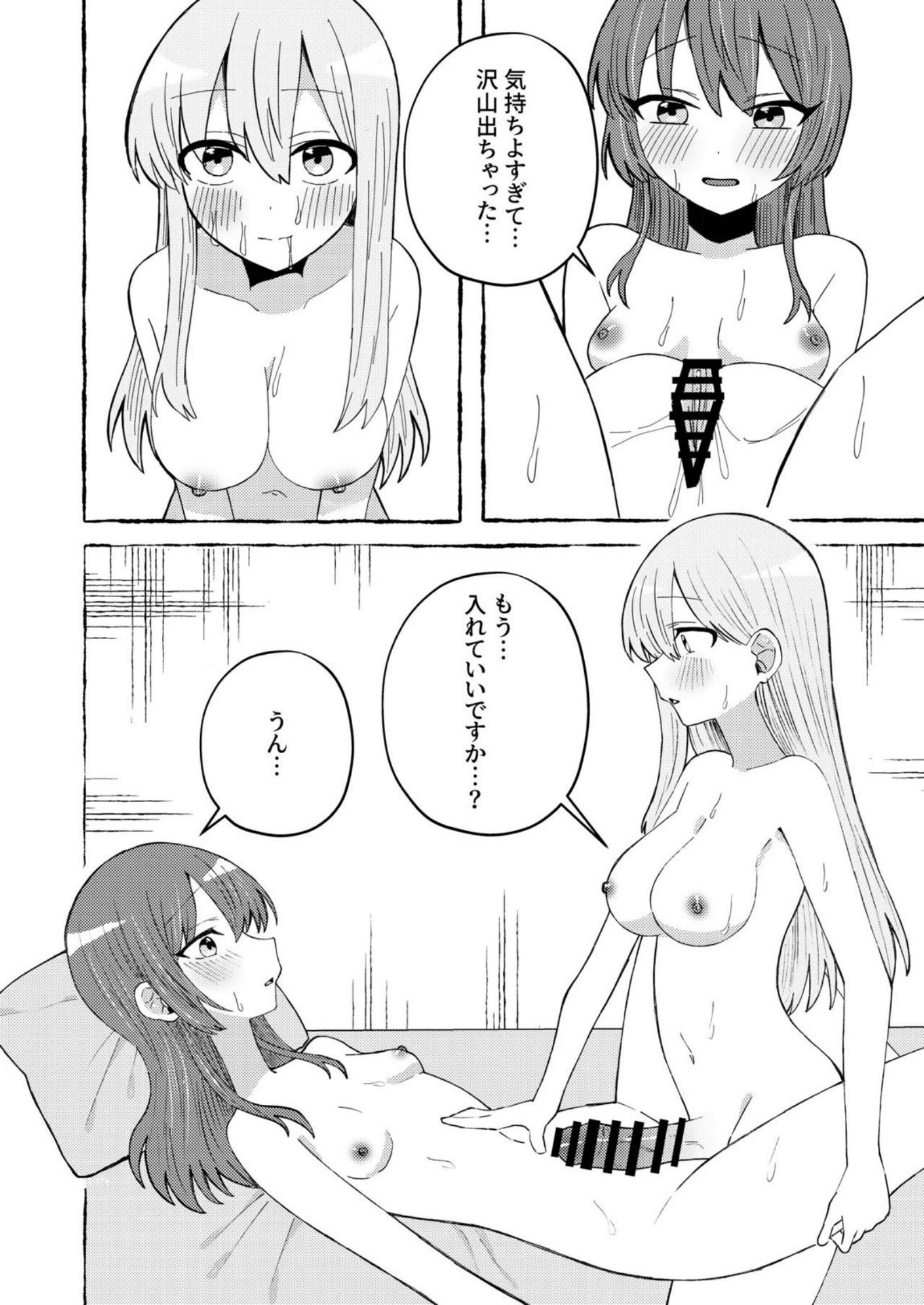
はーっ♡
喜多ちゃん…
もうぐちゅぐちゅ
ですね…
はっ♡
ぐちゅっ♡
はーっ♡
ぬちゅっ♡
だめっ♡
ぐちゅ♡
はーっ♡

ビクッ
ひとりちゃ…
だめっ…
もう…イきそうっ……
ビクッ

ビクッ…
ぷしゃあああああっっっ
ああああっっっ♥
はーっ♥
はーっ♥
はーっ♥
ビクビクッ
はーっ♥
ビクッ…


はーっ♥
はーっ♥
トロォ…
ビクンッ…
はーっ♥

やっ、そこ…
汚いからぁ……
ビクッ…
はっ…♡
きもちっ…♡
ビクッ…
じゅるっ♡
中っ…入って…
あっ、またイッちゃう…
あっ…
ピチャッ!…
あぁっ♡


気持ちよすぎて…
沢山出ちゃった…
もう…
入れていいですか…？
うん…

ズププププッ…
ぬ[redacted]ちゅっ♡
あっ♡
ビクビクッ
おちゅんっ

喜多ちゃん締め付け強すぎてっ……！もうイきそう……!!

喜多ちゃんっ

パンッ

あっ♡

パンッ

はっ♡

パンッ

パンッ

パンッ

喜多ちゃんっ イきそう……!!

パンッ

いいわよっ…中に出してっ……!!

ズチュッ…

パチュッ

パチュッ

あっ…喜多ちゃんっっ!!

ビクンッ
ありがとう♡
ビクンッ
射精で
まっ♡
ドピュッ…!!

もうなってるつもりだったけど……

トロォ…♡

きて♡

っ……

喜多ちゃんっ…!!
締め付け強すぎっ……!!

あっ…
ひとりちゃんっ……!!
すごっ…いっ……♡
奥まできちゃってるっ♡

ぱちゅっ♥

やっ♡

ぱちゅんっ♥

ぱっ♡

ぱちゅんっ♥

あっ♡

ビクッ

喜多ちゃんっ…
私と番になって
くれませんかっ……？

パチュッ

パチュッ♡

パチュッ…

私もっ…番に
なりたいっ……

パチュッ…

かぷっ♡
あっ♡

喜多ちゃん…
一生大切にします…

ぱあああ

これで私もひとりちゃんのお嫁さんになれるわねっ♡

ドカーン

ドサッ♡

きき、喜多ちゃん…
もう1回…!!
しましょう…!!

もうっ…
ひとりちゃんってば…♡

END

蠱惑の罠に嵌められて

有明灘

私は喜多ちゃんと番になった。この関係に至るまでの道のりは平坦ではなく、様々な葛藤と紆余曲折を経た。やっと平穏を取り戻せたかに見えたが、現実はそう甘くはなかった。ゴールテープを切った先には、新たなスタートラインが引かれていて――言い換えれば、番に至ったことにより、新たな悩みが生まれてしまったのだ。

喜多ちゃんと番う相手が、私で良かったのだろうかと。

確かに彼女は私と番になりたいと言ってくれた。私以外と番になるのは考えられないとまで言ってくれた。今はそうかもしれないが、この先の長い人生の中で、私よりも魅力的なαに巡り会う可能性があるだろう。いや、この世の大多数のαが私よりも有能な人間なのだから、絶対に会う。その時喜多ちゃんは私を選んだことを後悔するのではないかと不安に苛まれ、次第に顔を合わせるのが怖くなり、会話を交わすことも難しくなりつつあった。

とは言え、喜多ちゃんと距離を取ることは考えられない。私が喜多ちゃんを好きである事実は変わりなく、むしろ互いの気持ちが上手く通じ合わないほどに焦らされて、抱える想いは日々膨れ上がっていった。

私の不甲斐無さによって生じたこの停滞は、喜多ちゃんが発した言葉によって、遂に動きを見せることとなる。

◇◇◇◆◆◆◇◇◇

「ねぇ、ひとりちゃん。私のこと避けてるでしょ」

「えっ、あ……え？」

滅多に人が訪れることの無い、階段下の謎スペース。そこは私と喜多ちゃんがギターの練習をする格好の場所となっている。ある日の放課後、二人で練習に励んでいると、喜多ちゃんは何の脈絡もなく先の問いを投げかけてきた。突如として核心を突かれ狼狽えた私であったが、どうにか事態を取り繕おうと言葉を発した。

「さ、避けてなんて、いませんよ……？」

「……本当に？」

「あ――」

疑いの色を滲ませた視線を私に向けながら、喜多ちゃんはずいっと顔を寄せてきた。至近距離で見つめられ、咄嗟に吐いた嘘を見透かされそうな錯覚に陥り、反射的に顔を逸らしてしまう。すると喜多ちゃんは、低く湿度を帯びた声で言った。

「ほらやっぱり」

「え……？」

「ひとりちゃん、最近目を合わせてくれないもの」

彼女の鋭い指摘を受け、背中に嫌な汗が滲み出る。恐る恐る喜多ちゃんの様子を伺うと、怒っているような、寂しさを滲ませたような、そんな複雑な表情を浮かべていた。

「私、ひとりちゃんが嫌がるようなことしちゃった？」

「いえ！　それだけは無いです！　絶対に……っ！」

頭を勢いよく横に振って必死に否定する。私の言葉を受けて増々困惑した様子を見せた喜多ちゃんは、絞り出すよ

うな声で言った。
「だったら、なんで避けるの？」
「それは……っ!?」
煮え切らない態度に痺れを切らしたのか、私の頬に両手を添えた喜多ちゃんに、逸らした顔を強引に向き合わされてしまった。
「ちゃんと話して」
若草色の瞳に射抜かれて、その美しさに魅入られる。噤んでいた口が自然と開き、胸に秘めた言葉がつらつらとこぼれ出した。
「……不安、なんです。喜多ちゃんの番が、本当に私で良かったのかなって」
言ってしまってから後悔した。こんなにも情けない番の姿を見て、喜多ちゃんに幻滅されたのではないかと。けれども彼女は顔色一つ変えることなく、真摯に私と向き合い続けてくれた。
「どうして不安に思うの？」
「友達に囲まれている喜多ちゃんの笑顔は、とても眩しいです。私は喜多ちゃんにそんな顔をさせてあげられていませんし……今後も、できる自信がありません」
「それは嫉妬してくれてるってこと？」
「嫉妬もあるかもしれません。それ以上に、私の不甲斐なさに嫌気が差して仕方無いんです。こんな私じゃ、喜多ちゃんにいつ愛想を尽かされてもおかしくないなって、思います」
「……ふぅん」
尋ねたいことを聞き終えたようで、喜多ちゃんは私から身を離し、顎に指を添えて考え込む素振りを見せた。私が頼りなさすぎて、別れの言葉を思案しているのかと血の気が引く。しかし彼女はすぐに顔を上げると、瞳に冷たい光を宿して言った。
「ひとりちゃん。試してみたいことがあるの」
「試したいこと、ですか？」
「そう。ひとりちゃんの不安を取り除けるかもしれない方法を思いついたのだけれど……この後、時間あるかしら？」
「あ、ありますっ！」
願ってもいない提案に、椅子から勢いよく立ち上がり声を張り上げた。私の突然の行動が面白く見えたのか、喜多ちゃんは微笑みをこぼしながら口を開いた。
「それじゃあ、荷物をまとめてくれる？」
「えっ、ここではできないことなんですか？」
「うん。時間が無いから、早くして？」
「あ、はいっ」
笑顔で圧を掛けつつ促され、急いで身支度を整えると、喜多ちゃんに手を引かれて学校を後にした。辿る道のりはどこか見覚えがあって、目的地に着くと予感が確信に変わった。
「ここは――喜多ちゃんの家、ですよね？」
「そうよ。この時間なら誰もいないから、安心して？」
私の不安を先回りして払拭しながら、喜多ちゃんは扉の鍵を開けて私を家に招き入れた。手を引かれるまま導かれたのは、何度か訪れたことのある彼女の部屋だった。喜多ちゃんがすとんと座り込んだのに倣って、私もクッションに腰を下ろす。なぜか先ほどまでの勢いが無くなり、喜多ちゃんが俯いたまま黙り込んでしまったので、部屋には居心地の悪い静けさがたちこめていた。気まずい空気に耐え

かねた私は、どうにか状況を打開するために口を開いた。
「……あ、あの。さっき言っていた、試したいことって、なんですか……？」
「っ！」
勢いよく上げた喜多ちゃんの顔が真っ赤に染まっていて、私は訳が分からず困惑してしまう。しばらく見つめ合っている間に、彼女の表情は覚悟を滲ませた顔つきに変わっていった。
「き、喜多ちゃ……わっ!?」
ただならぬ様子に心配になって名前を呼び掛けたのと同時に、突然喜多ちゃんが立ち上がったので驚きの声を上げてしまう。そんな私をよそに、彼女はしなやかな手を胸元に寄せると、衣擦れの音を立ながらリボンを解いた。次にボタンを上から順にはずしてカーディガンを脱ぎ去る。顔が赤かったのは暑さのせいだったのだろうか、という私の短絡的な予想は早々に裏切られ、彼女はそのまま制服のボタンまでもはずし始めた。
「な、なな、なにしているんですかっ!?」
私の質問に答えることなく、喜多ちゃんは淡々と手を進めていく。好きな子が目の前で衣服を脱ぎ去っていく煽情的な光景を見せつけられて、心臓が破れんばかりに高鳴り、顔に熱が集中する。見たらダメだと分かっているのに、徐々に顕わになるきめ細かくて艶やかな肌から目が離せない。そのまま最後にファスナーを下ろして床にスカートを脱ぎ捨てると、彼女の体を覆うものは上下ともに下着のみとなってしまった。
夕日を照り返す彼女の眩しい足が、一歩私に歩み寄る。私は反射的に詰め寄られた分だけ後退する。それを数度繰り返すと、私の背中がベッドの縁に行き当たり、これ以上距離を取ることができなくなってしまった。それでもなお止まらない喜多ちゃんは、私の目の前まで歩を進めると、私の太腿の上にすとんと腰を下ろした。
若草色の瞳が私をじっと見下ろしている。彼女の表情から行動の動機を読み取ることができず、ただ見つめ返すことしかできない。しばらく視線を絡め合った後で、喜多ちゃんがついに沈黙を破った。
「不安にさせてごめんなさい」
切り出されたのは謝罪だった。謝るべきは自信を持てず、不躾な態度を取り続けた私の方なのに。彼女から先に謝らせてしまった不甲斐なさで自己嫌悪に陥る私へ向けて、喜多ちゃんは言葉の続きを口にした。
「学校にいる間、ずっとひとりちゃんの傍にいてあげられればいいのだけれど、友達付き合いもあるから難しいの。……でもね、こんな姿を見せるのはひとりちゃんにだけよ」
ひとりちゃんにだけ――その言葉で私は、心臓を鷲掴みにされたような気持ちになった。自らの行動によって私の不安を取り除こうとする彼女の健気さに胸が熱くなった。
半ば放心する私の頬に、喜多ちゃんの手が添えられる。視界が段々と端正な顔に覆われていき、羞恥に耐えかねて瞼を閉じたその直後、唇が柔らかな温もりに包まれた。
その口付けは触れ合わせるだけでは終わらず、私の唇をじっとりと食み、味わうようなキスだった。ぴりぴりとした甘い刺激を与えられ、息が切れそうになったその時、やっと喜多ちゃんは私から顔を離した。艶めかしい表情を浮かべた彼女が、私に向けてそっと囁いた。
「こうしてキスをするのも、ひとりちゃんにだけ」

その言葉に再度胸を高鳴らせる私の体を、喜多ちゃんはぎゅっと強く抱きしめて、私の肩に額をぐりぐりと押し付ける。すぐ傍でなびく朱色の髪から大好きな香りを感じた瞬間に、頭の中でスイッチが切り替わる感覚がした。

喜多ちゃんの動向を掴むのに必死で気づいていなかったが、ここは彼女の部屋であるが故に、彼女の香りが充満していた。その中で微かに感じる甘ったるい香り――Ωのフェロモンを感じた途端、私の体が疼き始める。カッと体温が高まって、熱い血潮が下腹部に集まる。股の付け根のジャージの布が盛り上がり、αの象徴が顕現したのが嫌でも分かった。

「わっ!? ちょっと、きたちゃ……っ!」

あろうことか喜多ちゃんは、私の下腹部に手を伸ばすと、ジャージ越しにαの象徴に触れた。手のひら全体を使って、まるで象徴の存在を確かめるように撫でまわす。いやらしい手つきによって与えられる甘い痺れに、ひとりでに肩が跳ね、甘い吐息がこぼれてしまう。そんな私の様子を恍惚とした表情で見つめていた喜多ちゃんは、私の耳元に顔を寄せてそっと囁くように言った。

「ねぇ、ひとりちゃん。……シよ?」

「だ、だめですよ! だって喜多ちゃん、ヒート来ていませんよね?」

喜多ちゃんが口にした情交の誘い文句に、私はひどく狼狽した。私たちにとって性行為は、第二の性に起因する発情を治めるための生々しい行為であり、平常時に行う理由が見当たらなかったからだ。

「ヒートじゃないからシたいの」

「え? ……え?」

あっさりと前提を覆されて困惑する私に向けて、喜多ちゃんは諭すような口調で語り始めた。

「番になる前も、番になった後も、ひとりちゃんは私がヒートの時にしかシてくれたことないじゃない? ヒートの時にするえっちって、本能に従わされていると言うか、ただ私たちの欲を解消しているだけに感じちゃうの」

喜多ちゃんが披露した見解は、私の意見とおおむね合致していた。しかしそれでは、今から致す理由を説明できていない。彼女にじっと視線を送って続きを促すと、私の要望を察した喜多ちゃんが再び口を開いた。

「でもね、ヒートが来ていないのにわざわざえっちするのって、お互いに愛が無いとできない行為だと思わない? ひとりちゃんの不安を取り除くには、うってつけの方法だと思ったの。……どうかしら?」

彼女の提案は、一見理にかなっているように聞こえた。でも一番大切な事柄が説明されていない。その身を捧げてまで、私の不安を取り除こうとしてくれる動機が曖昧なままだ。

「……私のために、どうしてそこまでできるんですか?」

「どうしてって……まだ分からないの?」

目を丸く見開いた喜多ちゃんであったが、すぐに怒ったような表情を浮かべた。非難するような視線を送られるが、答えが分からないと頭を左右に振って伝える。すると彼女は溜め息をひとつ吐いた後、私の手をそっと握りながら呟くように言った。

「ひとりちゃんが大好きだからに決まってるじゃない」

「っ!?」

拗ねたような表情を見せながらも、私の目を真っ直ぐに

射抜きながら吐露された明確な告白は、私が最も求めていた言葉そのものだった。そしてそれは、彼女が取った行動の動機として納得のいく答えでもあった。なぜなら私が逆の立場であっても、喜多ちゃんへの想いを原動力とすれば、なんでもできそうな気がするから。

「納得してくれた？」

「……はい。それはもう、十分すぎるくらいに」

「ふふっ、よかった。それじゃあ、始めましょう？」

「あ、っ」

喜多ちゃんは再び私の唇を奪い去った。この口付けを皮切りに、私たちはお互いの愛を確かめ始めたのだった。

◇◇◇◆◆◆◇◇◇

端的に感想を述べると、効果はてきめんだった。

喜多ちゃんがヒートを発症している時であれば、互いの本能が赴くままに快楽を享受することで精一杯になるのが常だ。けれど今日の情交は、頭に理性を残しながら執り行われたために、喜多ちゃんの表情に時折恥じらいの色が混じるのがすこぶる可愛くて、堪らなく愛おしく見えた。

そしてαの象徴を喜多ちゃんの身に収めている間、私の心は言葉に表すのが難しいほどの多幸感に満たされた。こんな私を受け入れてくれる喜多ちゃんの存在が奇跡のように思え、彼女に出会わせてくれた運命に感謝すらした。

「どう？　まだ不安は残ってる？」

未だ肌を朱色に火照らせて、浅い呼吸を繰り返しながらも、喜多ちゃんは私の状態を案じてくれた。労うように彼女の頬をそっと撫でながら、私は素直な気持ちを口にした。

「もう、大丈夫です。喜多ちゃんが私を好きでいてくれていると、十分に理解できました。……それに、私がどれだけ喜多ちゃんが好きなのかも、痛いほどに分からされましたから」

「そう。それなら良かった」

言葉では喜びを表しながらも、彼女の瞳には暗い影が落ちていた。どうしてだろうと疑問に思っていると、喜多ちゃんはゆらりと上体を起こして私と体を向き合わせた。

「ど、どうかしましたか？　……いッ!?　なにして……!?」

喜多ちゃんが私の首筋に顔を寄せた刹那、鋭い痛みが肌に走った。何が起きたか分からず困惑する私に目もくれず、肩や二の腕、次いで胸元にも同様の痛みを与えていく。彼女が顔を離すと、肌の上に赤い花弁が散らされていて、そこでやっと何をされたかを理解することができた。

「私もね、不安なの」

私の肌に自ら刻んだ印を指先でなぞりながら、喜多ちゃんは自身の心情を吐露し始めた。

「αは番を解消しても、他の子と関係を結べるでしょう？……でもね、Ωは違う。一度番を解消されたら、二度と番を作れない」

「あ……」

これから喜多ちゃんが何を言うのか、なんとなく察することができた。そして、私がどれだけ彼女に無礼を働いていたのかも気づくことができた。

「分かってくれた？　Ωにとって、番を作ることの重大さを。私がどれだけひとりちゃんのことが大好きで、重い感情を抱いているのかを。私が他の子に色目を使うなんてありえない。この先一生、これ以上良い人と出会えないと確

信したから、ひとりちゃんに項を噛んで貰ったんだもの」
　彼女が打ち明けた告白は、常人であれば受け止めきれないであろう重みを伴うものだった。けれど私にとっては心地良く、重みを預けてもらえるのが嬉しくさえ思った。しかしまずは、己が犯した非礼を詫びることが先決だ。
「すみませんでした。自分のことで精一杯で、喜多ちゃんの立場まで考えが至らなくて」
　謝罪の言葉を述べる声は、自分でも驚くほどに震えていた。そんな私の情けない姿を見ても嘲笑などせず、むしろ喜多ちゃんは慈愛に満ちた表情を私に向けてくれていた。
「謝らなくていいのよ。その代わり、もっと自信を持って？　私はひとりちゃんが思っている以上に、貴女のことが大好きだから」
「……私も、喜多ちゃんのことが大好きです」
「嬉しいわ。そのまま私を好きでいてね？　……これからもっと、好きになってね」
「……はい」
　私たちの距離がゆっくりと狭まり、唇が触れ合いそうになったその時、壁の向こうから物音が響いた。それは恐らく、玄関の扉が開け閉めされる音。何が起きたかを察して血の気が引き、身が硬直する私に向けて、喜多ちゃんは急かすように言った。
「早く隠れて！」
「は、はいっ！」
　彼女が指を差したベッドの上へと弾かれたように身を投げた。着ていた衣服と共に布団を掛けられた数瞬後、部屋の扉が無遠慮に開けられた音が聞こえた。
「ちょっとお母さん!?　ノックしてっていつも言ってるでしょう！　いま着替えてるところなんだから――」
　喜多ちゃんが啖呵切ったことにより始まった親子の言い争いを、私は息を殺して聞いていた。話している内容は頭に全く入ってこない。私の存在がバレませんようにと念じることに必死だった。
　祈りが天に通じたのか早々に決着がつき、遠ざかる足音とドアの鍵を閉めた音が聞こえた。人の気配が近づき布団を捲られ、明順応が追い付かず視界が白んで思わずぎゅっと目を瞑る。恐る恐る瞼を上げると、はにかむように微笑む喜多ちゃんが顔を覗かせていた。
「ごめんなさい。もう大丈夫だから」
　二本の指でピースサインをして見せる彼女の姿を見て、ほっと息を漏らしながら上体を起こすと、喜多ちゃんはベッドの上にのぼり、私に身を寄せて言った。
「危なかったわね。スリルを感じてゾクゾクしちゃった」
「正直もうダメかと思いました……」
「ひとりちゃんの靴、隠しておいてよかったわ」
「あっ、すみません。気を利かせていただいて」
　危機を脱した安堵も相まり、二人で小さく笑い合ったのも束の間、喜多ちゃんはその後、肝心なことを何でもないようにさらりと口にした。
「でもひとりちゃん、これで帰れなくなっちゃったわね」
「え？　……あ」
　彼女の言葉で自分が置かれた状況を察して愕然とする。私が帰るには、喜多ちゃんのお母さんの目を掻い潜って玄関にまで辿り着かなければならない。そんなスニーキングスキルなど持ち合わせておらず悄然とする私に対して、喜多ちゃんはうきうきと声を弾ませながら言った。

「大丈夫よ！　ご飯は部屋に持ってきて半分わけてあげるし、お風呂はお父さんとお母さんが寝た後で一緒に入りましょう？　始発が走る時間には二人とも起きて来ないから家から抜け出せるだろうし、心配しなくても駅まで送っていくから！」
「え、あ……」
　私が口を挟む間もなく、喜多ちゃんは淡々と話を進めてしまう。とは言えこの部屋から出られない以上、ご両親の普段の動きを誰よりも把握している彼女に従う他ない。
「だからひとりちゃんは、ご家族に連絡だけしてくれる？」
「は、はいっ」
　彼女に促されるままに、ジャージのポケットからスマホを取り出し、母へ帰りが朝になる旨のメッセージを送った。ディスプレイの灯りを落として顔を上げると、妖艶な笑みを浮かべた喜多ちゃんが私を見つめていた。
「ちょうど明日がお休みの日で良かったわね」
「あ、そういえばそうですね」
「寝過ごしたら大変よね。今夜は一緒に徹夜するべきだわ」
「わ、わかりました」
「それじゃあご飯まで時間あるし、もう一回シましょう？」
「あ、はい。……はい？　シましょうって、え？　わっ!?」
　流れに乗せられ頷いてしまったが最後、喜多ちゃんに腰の上に跨られてしまった。私が狼狽する様子を楽しむ様に、喜多ちゃんは髪を耳に掛けながら、湿度を帯びた視線を私に注いでいる。次に彼女が口にした言葉に、私は唖然とさせられることとなった。
「今日は一晩中愛し合いましょうね、ひとりちゃん？」
「あ――」

　そこで私は気づいてしまった。喜多ちゃんが行動を起こしたのが金曜日だったこと、そして私の靴をあらかじめ隠していたことから、初めから私を家に帰す気など無く、私を自分の部屋に軟禁するつもりで仕組んだ彼女の計画だったのではないかと。
　その仮説に思い至った私は身震いした。恐怖や嫌悪を感じたのではなく、甘美に打ち震えたのだ。コミュニケーション能力に乏しく、他人の気持ちを汲み取ることが苦手な私でさえも、嫌でも気づけてしまうくらいの重さを伴う愛情表現は、私の自尊心をどうしようもなく満たしてくれる。彼女の行動に付帯する気持ちが重ければ重いほどに、私へもたらされる嬉しさも増幅する。自分から行動を起こせない不出来なαの私にとって、喜多ちゃんが実行した作戦は最も効果的であったと思い知らされた。
　私の頭の両脇に手をつくと、喜多ちゃんはゆっくりと顔を寄せて来る。私は彼女の後頭部に両腕を回して唇を捧げ、喜多ちゃんの息苦しいくらいに重たい愛を受け入れる覚悟を示したのだった。

-あとがき-

初めてのぼ喜多本で初めてのオメガバースです。
タイトルに喜多ちゃんの気持ちを込めました。
人に見られてると興奮する喜多ちゃん、エッチですよね。
誘われると急にスイッチ入っちゃうぼっちもなかなかエッチですよね。
素敵な原稿を寄稿してくださった有明灘様、
この本をお手に取っていただいた皆様、本当にありがとうございます。
次回作は何を描こうかな～と悩み中です。
次回のイベント参加はおそらく結束ロック！10になります。お楽しみに♡

雪村そら

素敵な御本に私の作品を掲載してくださった雪村そら様、
そして私の拙い文にまで目を通してくださった読者様には感謝の念で一杯です。
オメガバぼ喜多、いいですよね。
陰キャのひとりちゃんがα だからこそ生まれる物語があると思います。
二人が距離を縮めるには、お互い本能に呑まれるか、
もしくは喜多ちゃんから手を差し伸べるかの二択だと考えます。
今回の作品では後者を選んでみました。少しでも読者様の心に刺されば幸いです。

有明灘

触って、愛して。

2025年1月19日 発行
なんこー・ろっく・ふぇす！-2025冬-

発行者 ： 雪村 そら
サークル ： stellar night
X ID ： @anpan_sora

ゲスト寄稿 ： 有明 灘
X ID ： @S_ariakesis616

印刷所 ： 株式会社栄光 様

触って

Touch me, love me...

BOCCHI THE ROCK!
Unofficial Fanbook

愛して

R18
18歳未満
購入・閲覧禁止
触って、
触って、
愛して。
愛して。
Touch me, love me...
BOCCHI THE ROCK!
Unofficial Fanbook
BOCCHI THE ROCK!
Unofficial Fanbook